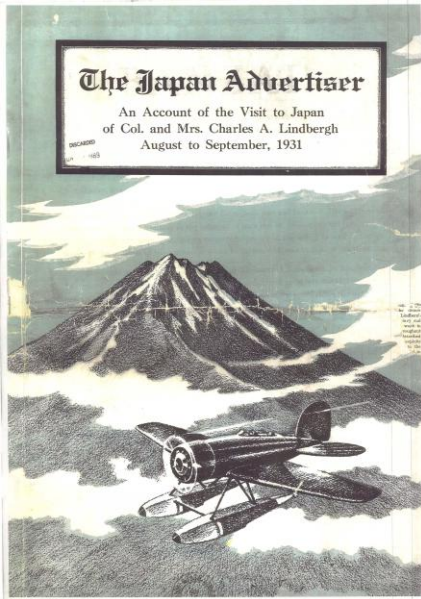




Vol. 2

はじめに

《三好企画の web サイトに掲載されている文は全て著作権法により保護されます。日本語訳の著作権は三好企画が保有しています。掲載されている文の閲覧と印刷には制限なく、研究にご利用ください。ただし、全文をコピーして流用すること、改ざんすることはお断りします。

これは 1931 年の日本社会、世界の航空機、航路についての貴重な記録です。論文の部分引用にあたっては、「出典」として下記をご掲載ください。》

『ジャパン・アドヴァタイザー』The Japan Advertiser 1931 年 10 月 10 日、ジャパン・アドヴァタイザー発行 日本語訳・三好企画 2025 年

アメリカで出版されたアン・モロウ・リンドバーグ著『海からの贈り物』（1955 年）の 70 年目の記念として、まずは一部を公開します。

凡例

〔 〕 及び＊のある部分は、訳註である。
原文は英語なので、漢字表記が不明のものはカタカナにした。

原版はタブロイド判 32 ページ、報道内容が重なった部分があるので一部を割愛した。

翻訳協力 順不同、敬称略

リーブ・リンドバーグ 兼子 奈緒美 中川 経子 浅野 正弘

1931年8月26～27日

日本到着の翌日 有名な神社2ヶ所を訪問

リンドバーグ夫妻 明治神宮と靖国神社を表敬訪問
大佐は飛行機の修理のため霞ヶ浦を再訪

8月27日、チャールズ・A・リンドバーグ大佐夫妻は非常に楽しい1日を過ごしたと、当日夫妻に同行していた人々は語っている。公式行事がなかったので、その日の大部分は比較的ゆっくりと過ごすことができた。また、当初の予定が変更になったため、夫妻が午前中に訪れた明治神宮と靖国神社もかなり静かで、いつものように群集に囲まれることもなかった。神社参拝のあと、リンドバーグ大佐は二人を無事に日本まで運んでくれた紅と黒の単葉機・シリウス号を修理するために出かけた。

この8月27日は、リンドバーグ夫妻歓迎行事の予定をはずして、二人の飛行士が十分休息できるように取り計らわれていた。しかし、早朝の神社参拝2ヶ所に始まり、その後昼前に遠く離れた霞ヶ浦にリンドバーグ大佐が出発したりと、当日の行動記録を聞くと、かなり活動的に思える。だが、公式行事に関するかぎりその日は全く予定がなく、リンドバーグ夫人はエドウィン・ネビル夫妻宅でアメリカ大使、ジェイムズ・ラッセル夫人とともに昼食をとった後、午後はそこで静かに過ごした。

アメリカ大使とラッセル夫人は、リンドバーグ夫妻の東京滞在中、トイスラー邸で二人だけで過ごせるよう、ネビル氏宅に泊まっていた。しかし昨晚は、リンドバーグ大佐夫妻の希望により、アメリカ大使とラッセル夫人は内輪での夕食をともにした。その場には他の者は誰も同席しなかった。



【写真説明】到着2日目、東京で神社を訪れたリンドバーグ大佐と夫人を取り巻く群衆。九段下の靖国神社にて。

神社参拝

リンドバーグ大佐と夫人は、明治神宮と靖国神社に参拝するため、朝9時30分にトイ斯拉ー邸を出発した。夫妻はアメリカ大使、ラッセル夫人とともに大使館の公用車に乗り、それに続く別の車にはトーマス・克蘭フォード中尉および夫人が乗車していた。

リンドバーグ夫妻は最初に明治神宮を訪れた。神社の神官達が準備を整えて夫妻の訪問を待ち受けていた。一行は他の参拝客とは別格で、最初の鳥居で車を止められることはなかった。規則では車がこの入り口の鳥居をくぐってはならないことになっているのだ。この神社を訪れた参拝客は普通、神社の入り口から第2の鳥居に続く両側を背の高い木立にはさまれた400mほどの砂利道を徒歩で行かなければならない。

しかし、リンドバーグ夫妻と接待役のアメリカ大使をはじめとする一行は、第二の鳥居まで直接車で乗りつけることが許された。一行の車が最初の鳥居に着くと、車の進入を遮断するために設置されている仮設柵が撤去された。

神社の大鳥居に着くと、一行は脇にある小さな社務所のひとつに招かれ、全員が神官たちからお茶をふるまわれた。神官たちのいでたちは白い袴と青の肩衣という正装であり、リンドバーグ大佐も夫人も、その場の荘重さと厳格さに感銘を受けた。

神殿に案内される

お茶をふるまわれた後、リンドバーグ大佐と夫人は神殿そのものの前まで案内された。夫妻は拝礼の儀式に参加することが許された。神官が夫妻に祈りの気持ちを表すひらひらした紙で束ねられた小枝を手渡し、それを夫妻が祭壇に捧げる、という儀式である。

若いリンドバーグ夫妻がすでに日本人に心から慕われていることは大掛かりな歓迎行事からも証明されているが、神道の儀式に参加するという、さりげない行為は、日本での二人の人気を高めるのに大いに寄与した。その場に居合わせたすべての人々は、リンドバーグ大佐と夫人がすぐにその場の雰囲気になじんでみせた敬虔な態度に気付いた。夫妻が日本の偉大な天皇のひとりを記念する祭壇の前に立って頭を下げたとき、もっとも意義深い方法でアメリカと日本の絆をより強く固めているように思われた。

飛行機の整備をしたいというリンドバーグ大佐の要望により、神社参拝の予定が午後から午前に変更されたために、明治神宮で夫妻を待ち受ける群集の数はさほど膨大なものではなかった。そのおかげで夫妻は、明治神宮と晴れた夏の日の朝が醸し出しているように思える、非常にゆったりとした静かな雰囲気を心行くまで味わうことが出来た。簡素な神道の建築においては、褐色の木材と屋根の魅力的な輪郭を貫く、輝く黄金色の棟飾りの調和、また、そびえる松の木立に囲まれた神社の建物の様子は、リンドバーグ夫妻にとって東京滞在2日め

の出来事の中から記憶に留まる一幅の画になるに違いない。

次の神社へ

靖国神社参拝は、これとは全く異なった対照的なものであったが、興味深い出来事が数多くあった。何らかの方法でリンドバーグ夫妻の予定の変更を探り出したとみえ、ここには飛行士夫妻をひと目見ようと待ち構えている非常に多くの日本人が集まっていた。リンドバーグ大佐は背の高い細身の体を薄いグレーのスーツにつつま、大佐の小柄な妻は、よく似合う可愛らしい白とブルーのワンピース姿だった。リンドバーグ夫人のドレスは白にブルーのプリント地で作られた夏向きのもので、ふくらんだ短い袖とウエスト丈がより短いボレロジャケットがついている。黒っぽい短い巻き毛の上にはしゃれた小ぶりのネイビーブルーのベレー帽をかぶっていた。帽子をかなり後方にずらしてかぶっているので、夫人の繊細な顔立ちがよく見えた。

靖国神社では日本の歴史の栄光のために命を捧げた陸海の軍人達を追悼して、アメリカ大使、ラッセル夫人、そしてクランフォード中尉夫妻もまた神殿の祭壇に玉串を供える儀式に参加した。

リンドバーグ夫妻は2ヵ所の神社で、神官が記録をとっている名士たちのための芳名帳に名前を記帳した。

リンドバーグ大佐が霞ヶ浦に出発した後、リンドバーグ夫人はその日の残りの時間を、珍しい体験を楽しみながらネビル夫妻宅で過ごした。リンドバーグ夫人もネビル夫人もネビル家で昼食をとり、それに引き続いてリンドバーグ夫人は少しばかり日本の芸術に触れる機会を持ったのである。ネビル夫人に日本画を教えている吉村夫人が訪れて午後を過ごし、3時間ほどではあったが、日本画のみならず盆景と生け花も実演してみせ、リンドバーグ夫人はその様子を書きとめた。吉村夫人はこの国の多くの女性的な芸術に関わる人々の間でその権威として知られており、とりわけ生け花の技法で名声を得ていた。

吉村夫人がリンドバーグ夫人のために最初に披露したのは、盆景による風景作りである。それに使うために、くすんだ灰色をした、ひび焼きの陶製の浅い盆を持参していた。小さな山の斜面、ほとばしる水の流れ、そして砂と波を表現する白い粉の筋で作られた海を渡る小さな船、という小さな風景がリンドバーグ夫人の目の前で作られた。

盆景を完成させた後、吉村夫人は特別な生け花を生けて見せて、それからリンドバーグ夫人に生け方を教えた。吉村夫人は、自然を生かした自由投げ入れ様式の生け花を専門にしており、この様式が近ごろ日本の女性の間に広まりつつあるのは、多少なりとも夫人の影響によるものである。吉村夫人は幅が広く底が浅い、白地に青い染付けの入った伊万里焼の花器

にスイレンとススキの美しい取り合わせの生け花を生けた。そしてリンドバーグ夫人は自身自身の生け方で作品を完成させた。片側に羽のような葉を生けて、そこからひと房の小さなナデシコが伸び、そして青いリンドウのつぼみをまとめて挿し、作品を完成させた。

日本画にも挑戦

リンドバーグ夫人は日本画の初心者向けレッスンをことのほか楽しんだ。日本の黒インクである墨でもって、薄い白い紙に画を描いたのだが、この芸術を本能的に理解したようである。このように自由で力強いタッチで描くことは、一見単純なようで実は難しいこの技法に挑戦する西洋人の誰もがそうなのだが、夫人にとってまったく初めての経験であった。リンドバーグ夫人は初心者向けに決まって教えられる類の花の形を描き、アイリスの花を描くのを楽しんでいるようであった。

吉村夫人は、アンと言う名前を発音通りの漢字にすると、どのようになるかリンドバーグ夫人に書いてみせて、中のひと文字は「平和」という意味であることを説明した。

リンドバーグ大佐と夫人は靖国神社からトイスラー邸に午前 11 時に戻り、それからほどなく 11 時 30 分に、大佐は車で霞ヶ浦に向かった。時間を節約するため、昼食を持参して飛行場に向かう途中、車のなかで食事をとった。リンドバーグ大佐に同行したのは、トーマス・克蘭フォード・ジュニア中尉、ロッキード社日本支社代表のドン・ヒリス氏である。

リンドバーグ大佐が自由に使えるようにとフォード社が提供したリンカーンのリムジンは海軍航空隊飛行場までの道のりを 1 時間 30 分で走り、大佐はただちに飛行機の修理に取り掛かれるよう、準備万端だった。飛行場の海軍士官たちは飛行機の整備に必要なあらゆる援助を提供する手はずを整えていたが、昨日は機体の一般的な清掃のほかには、些細な作業以外に手を貸せることはなかった。

その日の午後、霞ヶ浦では、装具の分類とこれまでの飛行の途中で飛行機が受けたかもしれない損傷を発見するために、細部にわたる徹底的な検査が行われた。潤滑油タンクから生じた少量の漏れは、タンクを取り外して穴をふさいで修理した。穴はタンクの上方近くにあったので重大な損傷ではなく、飛行体勢をとっている時にはオイル供給に影響することはなかった。支柱の損傷は 8 月 27 日には手をつけず、後ほど修理のために中島飛行機株式会社に搬送された。ワシントンからの長距離飛行中に生じたプロペラのかすかな擦り疵は、研磨して取り除かれた。

大佐はまた、機内から飛行のために持参してきた特別な装具を取り出した。その中には、苦境に陥った時にロケット信号弾を撃つためのピストル 2 挺、ロケット弾のストック、折りたたみ式ゴムポートと帆とオール、飛行機用の錨、害虫に悩まされることが非常に多いカナダ北西部に不時着した際に必要になるかもしれないと考えた防虫ヘルメット、缶詰の食料、

料理器具、そして特注の伝熱飛行服があった。この飛行服について大佐は、飛行機のバッテリーに接続して電源を入れて使用したことはなく、通常の防寒飛行服としてのみ着用した、と語った。飛行中の天候が電熱線を使って更に暖房を必要とするほど極端に寒冷だったことが一度もなかったからである。

エンジンカバーも取り外されたが、エンジンに手を入れる必要はまったく無いことが分かった。しかし、日本人航空士官らがロッキード社の動力装置を点検してのちに大いに役立てられるようにと、カバーは外したままにしておかれた。

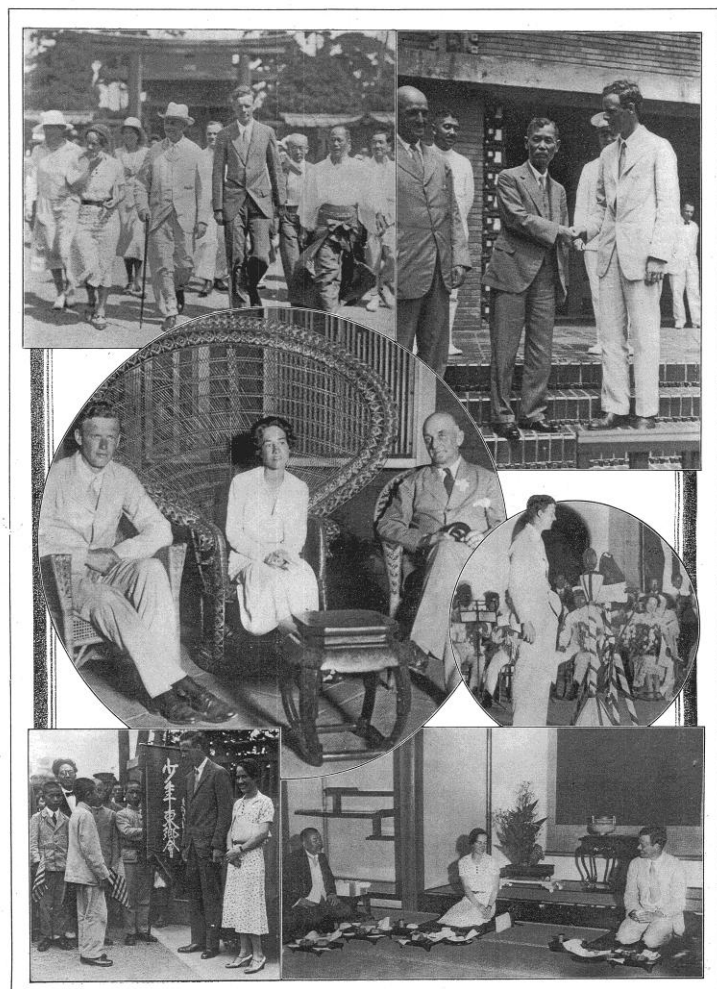
リンドバーグ大佐は、日本海軍担当者たちはいつも、大変気遣いに溢れた有意義な援助を提供してくれた、自分とリンドバーグ夫人に対する好意の数々に感謝する、と述べた。また、ヒルズ氏は大佐自身と同行者一同に貴重な援助を提供してくれた。また、専門家であるロッキード社の代理人が日本に駐在していたことは、まことに好都合であったとも述べている。

【写真説明】 左上：明治神宮にて。 右上：若槻首相を公式訪問。 中央左：東京到着の日の夜、公式インタビューにて。 中央右：日比谷野外音楽堂にて、東京市長主催歓迎会でスピーチを行う。 左下：清澄庭園にて、東郷青年会(日本の国民的英雄の崇拜者による団体)の若者たちが二人の飛行士を表敬。 右下 新聞社社長・野間清治氏の歓待を受けて。

CONGRATULATING those intrepid fliers, Colonel and Mrs. Charles A. Lindbergh, upon the successful conclusion of their Goodwill Mission to Japan, the leading banks of Nagoya take this opportunity of extending their heartiest expressions of esteem to the American People, whom they represent.

Aichi Bank Meiji Bank Nagoya Bank

President President President
YOSHIRO WATANABE SHIGEHICO IKOMA KOSABURO TSUNEKAWA



1931年8月28日

3日目は政府高官を次々と訪問
帝国飛行協会主催午餐会、歓迎会、祝宴に出席

リンドバーグ夫妻、飛行技術における目覚ましい実績により、飛行協会より最高位の勲章を授与される

——帝国ホテルにて3閣僚が壮麗な式典を主催——
スピーチは米国でも放送

東京滞在3日目の8月28日、リンドバーグ夫妻のために歓迎行事が始まった。午前中のリンドバーグ大佐は政府高官を訪問し、午後は逓信・陸軍・海軍の3閣僚が帝国ホテルにて主催する祝宴に、夫妻が主賓として出席した。

午前中に大佐が公式訪問に出かけた時には、リンドバーグ夫人は同行せず、帝国飛行協会の本部で夫と合流し、夫妻はその場で航空界における顕著な功績に対して同協会から最高位の勲章を授与された。

公式訪問が行われる

リンドバーグ大佐にとって、その日の午前中は多くの日本の政府関係者を公式訪問する行事が目白押しで、多忙な時間であった。最初の訪問先は逓信省である。リンドバーグ大佐一行は滞在先の築地の邸を出発した。一行のメンバーは、アメリカ大使、アメリカ大使館参事官エドウィン・ネビル氏、日米協会副会長・樺山愛輔伯爵、大佐が日本滞在中の補佐役トーマス・克蘭フォード・ジュニア中尉である。一行が逓信省に到着したのは午前10時であった。

高名なリンドバーグ大佐を迎えるために、大勢の役人が入り口で待ち受けていた。小泉又次郎大臣はリンドバーグ大佐と握手を交わして、ひと組の銀のカップ3個を大佐に、そしてリンドバーグ夫人には京都で作られた美しい日本人形を贈呈した。一行はアイスクリームをご馳走になりながらしばらく和やかに歓談したあと、逓信省をあとにした。

小泉大臣はリンドバーグ夫人に体調を案じて尋ね、大佐には「困難な飛行の後なので、まだ疲労が残っているのではないか」と尋ねた。リンドバーグ大佐は、「計吐夷島^{ケトイ}でひと晩中飛行機を修理した後に、もっとも疲労を感じたが、今ではすっかり回復して元気である」と答えた。また、落石無線局から受けた援助に対して感謝の気持ちを述べた。

職員たちは廊下に飛び出す

一行の記念写真撮影が行われているとき、逋信省の職員たちは、大人気の飛行家の姿をひと目見ようと廊下に走り出て、省の高官たちがリンドバーク大佐と歓談している部屋に向かった。事務員、タイピスト、雑用係の皆が一群となって押し寄せたため、窓ガラスが何枚か割れるほどだった。

次にリンドバーク大佐一行は陸軍省に赴き、南次郎陸軍大將を訪問した。また、リンドバーク大佐は海軍大臣の男爵安保清種海軍大將を訪問した。大佐は日本に到着して以来、安保大臣とはこれまでに長時間にわたって話をしている。さらに、外務大臣・幣原喜重郎男爵を訪問した。

午前の遅い時刻に、リンドバーク大佐は総理大臣官邸に首相・若槻礼次郎男爵のもとを訪れた。若槻首相はロンドン海軍会議でリンドバーク大佐の義父にあたるドワイト・モロウ氏と会ったときの思い出を語った。

午前中の最後の訪問先は永田秀次郎東京市長で、その後、一行は帝国飛行協会に向かった。

勲章の授与式が行われたのは、日本画が何枚も飾られた美しい部屋で、同協会副会長の橋本圭三郎氏自身の手で二人の飛行士の胸に勲章をつけることで、この儀式は名誉あるものになった。授与式のあと、リンドバーク大佐と夫人は飛行協会主催の午餐会に主賓として招かれた。会場には大テーブルが8つ並べられていた。午餐会のメニューは8種の料理のコースで、メニュー・カードには富士山の絵が描かれていた。それは、リンドバーク夫人が日本で見にした数多くの典型的な浮世絵の中でも、「素晴らしい」と感心していた絵柄である。

橋本氏、リンドバーク夫妻歓迎の辞を述べる

帝国飛行協会副会長、日本石油社長の橋本圭三郎氏は、協会を代表してリンドバーク大佐と夫人につぎのような歓迎の辞を述べた。

「主賓のお二人に歓迎の辞を述べるにあたり、ふさわしい適切な言葉を見つけることができません。」

「リンドバーク大佐は、4年前に大西洋を征服して以来、世界中からくまなく、あらゆる形で賞賛と敬服を受けてこられました。そして、私が大佐の目の前に立っておりますこの時、大佐が新たな空を征服したことで、世界は再び驚いているところです。」

「記憶に残る喜ばしいこのような状況のもと、幸いにも、この午餐会にご出席いただき感謝の気持ちをリンドバーク大佐および夫人に、帝国飛行協会会員一同を代表してお伝えすることができました。」

「大佐の超人的とも言えるこれまでの飛行歴については、この場であらためて言葉と時間を費やして皆さんに思い出していただくことはいたしません。次から次へと成し遂げられた画期的な偉業の数々は私たちの記憶に依然として鮮やかであり、そのひとつひとつを熟知しているからです。」

「これらの重大な飛行上の記録が科学と航空学にいかに寄与してきたか考えますと、また、20世紀が航空の時代であることを考えますと、人類に対する大佐の貢献をいくら高く評価してもしすぎることはありません。また、大佐がアメリカの人々の英雄であることも、まったくもって当然のこととっております。」

北太平洋制服

「しかし、私たち日本人にとって貴重なのはこのたびの偉業であり、この出来事の意味と重要性をどれだけ力説しても足りないほどです。リンドバーグ大佐は慎重かつ積極的な戦術で、ついに難攻不落であった北太平洋を征服し、新しい空路によってふたつの大陸を結びつけました。」

「この危険かつ大胆な飛行が日本人の心に純粋で崇高な感情を引き起こしたという点で、このたびの驚嘆に値する空の旅は、広範にわたる類のない重要性を持つものなのです。また、この場で詳しく申し上げることはいたしません、こちらにおいでのご夫人がパイロットである夫とともに命の危険を冒しながら、その手で無線機を操ってメッセージと情報を通信したことは、私どもひとりひとりの心に響く逸話です。国民から最も愛されているアメリカ人男性と女性が協力して成し遂げた今回の成果は、本当にこの世で最も美しい挿話の完璧な再現であり、より深い理解と恒久的な友好を創り出す、あらゆる崇高で偽りのない感情を引き起こさずにはられません。」

「アメリカ国民と日本国民は、2国間の親密な交流における新時代を切り拓いてくれたリンドバーグ大佐と夫人に感謝の念を抱いております。」

「閣僚の皆様およびご来賓の皆様、この懇親行事においでいただいたことを感謝いたします。では、皆様、リンドバーグ大佐と夫人のご健康を祝して乾杯いたしますので、どうぞご起立をお願いいたします。」

この午餐会に出席したのは、午前中の公式訪問の際リンドバーグ大佐に同行した一行、および逓信大臣、陸軍次官杉山元陸軍中将、海軍省航空本部長・安東海軍中将、前協会会長・長岡外史陸軍中将、ジェイムズ・F・ラッセル夫人、トーマス・克蘭フォード・ジュニア夫人、その他の著名な来賓である。

リンドバーグ夫人の休息

午前中は公式行事に時間をとられることなく、ゆったりと過ごしたので、午餐会でのリンドバーグ夫人は十分に休息をとれた様子であった。この前にリンドバーグ夫人は、エドウィン・ネビル夫人と幣原外相秘書官・岸倉松夫人とともに昭和通りなどを車で走りながら街の様子を垣間見て、上野公園に向かった。

3名の婦人たちは公園の下手にある不忍池^{しのばずの}を望む茶屋の一軒に入り、目の前に広がる趣ある景色を眺めながら穏やかな合間を楽しんだ。こうしてリンドバーグ夫人は、当日の正式な祝賀行事に臨む前に休息する機会を持てたのである。

リンドバーグ夫人は日本の茶店の、古風な趣のある雰囲気魅了され、さらに、白い畳を敷き詰めた塵ひとつ落ちていない部屋に入るときに靴を脱ぐという行為に、非常に興味を持った。また、夫人は一行に日本茶を淹れてくれた小柄でかわいい女中の手際の良い給仕ぶりに、じっと見入っていた。岸夫人はリンドバーグ夫人が尋ねる日本に関するたくさんの質問に答え、また、自分自身の家族や子供時代の楽しかった逸話を語った。

婦人達、買い物に行く

上野の茶店を出た後、リンドバーグ夫人はネビル夫人と岸夫人とともに、上野公園へと続く通り沿いに立ち並ぶ、絵のように美しい店の何軒かで買い物をした。店ではたくさんの日本の浮世絵を見せてもらい、たちまちリンドバーグ夫人は気に入った。なかでも大きく大胆に描かれた版画がお気に入り、とりわけ役者の顔を描いたものが夫人の興味を引いた。

夫人は日本の商店めぐりを楽しみ、色とりどりの和紙の日傘が通り沿いに飾られた一画では、いくつもの傘に目をとめて、見せて欲しいと頼んでいた。

帝国飛行協会での午餐会のあと、大使館主催の歓迎会に出席するために東京倶楽部に向かう前に、リンドバーグ夫人は午後、休息をとった。

倶楽部で歓迎会が催される

リンドバーグ大佐と夫人のために東京倶楽部で催された歓迎会のホスト役は、アメリカ大使とジェイムズ・F・ラッセル夫人であった。1200名の人々が招待され、5時から6時30分の間、広々とした倶楽部の宴会場にはおそらく700名ほどが集まっていた。

この会には光栄にも外務大臣・幣原喜重郎男爵、海軍大臣・安保清種海軍大将、陸軍次官・杉山元陸軍中將、宮内次官・関屋貞三郎氏、また、東京に滞在中の海外の外交関係者が出席していた。外交使節のなかで首長クラスの出席者は、スペイン首相カルデナス氏および夫人、ルーマニア代理大使ストイセシコ氏および夫人、ポーランド代理大使アントニ・ジャドズェスキー氏、そしてチェコスロバキア代理大使ミロシュ・クルプカ氏である。

同倶楽部の宴会場は2階にある。到着した招待客は、主会場の手前に設けられた控えの間に通される。そこには客を迎えるべく、アメリカ大使とラッセル夫人とともに並んでいるリンドバーグ大佐と夫人がいた。参加者はアメリカ人と東京在住者に限らず、少なくとも半数はアメリカ以外の国の出身、あるいは東京以外の都市から来ていた。横浜を代表してきていた者が非常に多く、また、ヨーロッパのほとんどの国からも大勢いた。日本の官界からは代表者が遣わされており、部屋は金モールでまぶしいほどだった。

昨日、午後の歓迎会で来客を迎えるために並んでいたのは、リンドバーグ大佐と夫人のほかは、アメリカ大使とラッセル夫人だけであった。来客が近づいてくると、トーマス・クランフォード・ジュニア中尉がアメリカ大使に紹介し、同様にリンドバーグ大佐と夫人、ラッセル夫人に紹介した。

リンドバーグ夫人は、ダークブルーと白の模様のシルクで仕立てた、シンプルで愛らしい裾の長いフォーマルドレスを着ていた。ドレスは涼しげな袖なしで、デザインにマッチした幅広のケープカラーがついている。その上に黒っぽい革のベルトを締めて、小麦色のストッキングと洗練された趣のつや消し黒革の靴、という装いであった。ラッセル夫人は夏らしい趣のあるくすんだグリーンのレースの裾の長いフォーマルドレスを着ており、スカートの裾は優雅に渦巻いていた。その上に、ふわりとたなびく袖のついた小さめのジャケットを羽織っていた。

希望する来客には紅茶とケーキがふるまわれた。歓迎会は6時15分に終わり、来賓は迎えの車まで送られた。

この日、公式行事の最後を締めくくったのは、通信大臣、陸軍大臣、海軍大臣が趣向を凝らして帝国ホテルで催した晩餐会である。そこには、アメリカ大使館関係者とその夫人達、日本政府高官、そして東京にいる著名人が招かれた。

多彩な趣向の晩餐会

この晩餐会は、これまでに行われたこの種の公式行事としては、最も華麗なもののひとつであった。部屋の中央には長いテーブルが据えられ、あちらこちらに鮮やかな色合いの花束が飾られていた。部屋の後方にはこの場にふさわしい背景として2枚の巨大な旗が縦長に掲げられている。広々とした宴会場の中央のシャンデリアからは、日本とアメリカの国旗が交互に下がる飾りモールが四方八方に伸び、華やかな日本の提灯が幾重にも中央のシャンデリアを取り巻いていた。

行事は音楽の演奏で7時30分に始まり、そのあと晩餐会となり、小泉通信大臣、アメリカ大使、そしてリンドバーグ大佐がスピーチを行った。特別に設けられた中稀網でNBCと

CBS の両局がこの催しの様子をアメリカでもラジオで放送した。その時、ニューヨークでは朝の 6 時から 7 時の間、そして西海岸の地域ではさらに早い時間であった。

日本とアメリカで大佐のスピーチに耳を傾けていた膨大な数の聴取者は、始まって間もなくスピーチが途切れたときには、かなり驚いた。カメラマン達が大佐めがけて一斉にフラッシュをたき、ライトをあてたためである。リンドバーグ大佐は騒音と混乱が収まるまでスピーチを中断し、それから再び最初からスピーチを始めた。

この式の模様は、ホテルの宴会場で JOAK 局が受信し、周波数 7880 キロサイクルで日本の JIAA を通してアメリカに中継され、アメリカ合衆国政府局で受信した電波は CBS に、カリフォルニア州ボリナスの RCA 局で受信された電波は NBC に送られた。

飛行士のスピーチ

リンドバーグ大佐は次のように語った

「私たちは、日本の皆さんとお会いして日本についてもう少しよく知るためにやってきました。学生時代、アメリカでは地球の反対側にある国として日本はよく知られていました。子供時代、日本という名前は魔力に満ちていました。そこはおとぎの国で、別の天体に住んでいるかのように、自分たちとは違う人々のように思っていたのです。実際、地面から落ちないように逆さまに歩く日本人の能力には、まったく驚きました。」

「この数年の間に、日本人に対するアメリカ人の概念は急速に変化しています。アメリカでも、多くの日本人の皆さんに会うようになりました。家庭では、多くの日本製品が使われるようになりましたし、日本人科学者の名前もよく知られるようになりました。また、両国の人々にとって共通の関心事である国際的な事柄をしばしば新聞で読んで知っています。また、関係がより緊密になっている場合もあります。飛行機の操縦という仕事に従事している私たちの多くは、今日、日本の絹で作られたパラシュートのおかげで命を助けられているのです。」

「無線と飛行技術の進歩によって、距離の隔たりによる未知はもはや存在しません。日本の皆さんは、多くの点で同じ興味を持ち同じような問題に直面している私たちと同類の存在となりました。」

「私たちは空路、地球の天辺を越えて日本にやってきました。飛行機が北極近くを飛んでいるとき、アメリカ人が表を歩き、日本人が逆さまに歩いているわけではなく、両者とも地球上を同じ角度で歩いているだけなのだとわかりました。日本とアメリカでどこが大きく違うかと言えば、起点を決めるにあたって、経緯 70 度とするか 140 度とするかという点だけだとわかったのです。」

空からは見えない国境

「地上を離れて飛び立てば、アメリカの地図帳に載っている緑色の国と紫色の国を分断している、濃く塗られた国境線は見えません。大空の上空から地球を見て、電波を通して遠くの人々と言葉を交わせば、過去の時代から受け継がれてきたこのような壁は無意味なものになるのです。」

「人類に飛行機と無線が結果的にどのような影響を与えるのかはわかりませんが、将来性については、強く確信しております。しかし、ひと世代の進歩に過大な期待をしてはなりません。それでも、疑いもなく、今日の成果は今世紀の終わりまでに達成されるであろう成果を暗示するものです。船舶の歴史時代の航海技術がもたらした結果は、飛行機によって維持されることでしょう。そして、外国との関係に及ぼす影響は広範囲にわたるものでしょう。私たちは、もはや遠く離れた国を自分たちと無関係だと傍観することはできません。事実、遠く離れた国などというものは、すでに存在しないのです。過去の時代の距離は今日の私たちにとってもはや問題ではありません。そして、今日の距離は未来の世代の目からすれば、同様に問題ではなくなっていることでしょう。距離を測るものは、もはやマイルではなく時間なのです。」

「私たちはこれまでも日本の皆さんに親切にさせていただきました。町でも村でも、あらゆる配慮をしていただきました。しかし、日本人の国民性を私たちに最も強く印象付けたのは、霧の中、択捉島^{エトロフ}で漁師の家の近くに着水した時ではないかと思います。私たちが何者かも知らず、言葉も通じませんが、私たちが停泊したあと、その漁師は雨の中、私たちを助けるために外に出てきてくれて、自分の家に連れて行き、米と魚の夕飯をご馳走してくれたのです。」

「東京での滞在はまだ2日目であり、日本に来てからもまだ10日目です。それでも今回の訪日で十分に私たちは報われました。そして、明日帰らなくてはならないとしても、今回の飛行の何倍もの価値ある経験を日本から持ち帰ることでしょう。」

小泉大臣のスピーチ

以下が小泉大臣のスピーチである。

「閣下ならびに賓客の皆さん、ニューヨークから霞ヶ浦にいたる12,000kmの飛行を完遂し、東京に到着したリンドバーグ大佐および夫人に歓迎の意を表すため、今宵私たちは集まりました。長旅の疲れから回復する機会も持てないうちに、このように早速私どもの招待に応じいただき、ご夫妻には心から感謝いたします。また、ご親切にもこの会にご参列いただいたアメリカ大使閣下にも、衷心より感謝いたします。」

「世界中の人々は心をひとつにして、航空技術の進歩に計り知れない貢献をしたリンドバーク大佐を尊敬しています。私たちの心に残る大佐の大西洋無着陸飛行は、人類の歴史のなかで最も傑出した出来事としてこれからも記録されることでしょう。この画期的な飛行の成功は、世界中の航空関連事業のすべての分野に新たなはずみをつけました。そして、航空科学はかつて思いもよらなかったほどの進歩と発展を短期間に遂げました。」

「また、リンドバーク夫人はアメリカでも名家のひとつに数えられる家柄のご出身です。アメリカの若い女性が求める最高の理想を具現化した高潔な品位と人格によって、夫人はアメリカ国民から慕われています。その気高い感化力をご自身の家庭に及ぼすばかりでなく、航空技術を進歩させるという夫の仕事をご夫人は手助けしてまいるのです。リンドバーク夫人ご自身の飛行距離は 50,000km 以上に及んでいます。こちらの高名な飛行家夫妻が太平洋の反対側から我が国にやって来られたことを、私たちは本当に嬉しく、また光栄に思っております。」

つながった二大陸

「リンドバーク大佐が歴史上有名な大西洋横断飛行によりヨーロッパ大陸とアメリカ大陸を結びつけたように、今回のリンドバーク大佐と夫人による飛行は、日本・アメリカ間定期便航空路開拓への道筋をつけることでしょう。移動と交通手段の発達により二国間の友好が深まるであろうことは申し上げるまでもありません。今回の大事業の成功は、リンドバーク大佐と夫人に新たな栄誉をもたらし、航空技術の発達に更なるはずみをつけたばかりでなく、日本とアメリカの友好的交流の新たな時代へと導いたのです。」

「このような重要性を理解していたので、ニューヨークからリンドバーク大佐と夫人が飛び立ったことを知って以来、日本国民はこぞってお二人の無事到着を切に待ち受けておりました。さらに、選択された空路が大変な長距離にわたり、また地理上、気象上の並々ならぬ条件という点で、おびただしい困難に見舞われるものであったため、日本国政府および国民はできる限りの便宜と援助を差しのべるべく準備しておりました。」

「リンドバーク大佐と夫人は、私たちがよせる最大の期待を裏切ることはありませんでした。見通しの悪い霧のためにエンジンが故障した時でさえ、リンドバーク大佐は日本の政府関係者から派遣された技術者の到着を待つ必要はないと判断し、根室の町まで無事に自制して飛ぶことができたのです。この最も困難な空路をみごとに飛んでみせたことで、私たちは世界一の飛行家として、大佐に心からの尊敬を捧げずにはられません。」

慎重な態度

「リンドバーグ大佐は、たぐいまれな天賦の技能の持ち主ではありますが、最も慎重な手段を必ずとってきました。一方、リンドバーグ夫人は旅の苦難を夫とともに分かち合い、無線を効果的に操作して貴重な援助を与えていました。このように、お二人が私たちに示してくれた素晴らしい模範は日本人だけでなく、世界中の人々の心に永久に感銘をとどめずにはおきません。アメリカ大陸を横断し、北太平洋上を飛行しているリンドバーグ大佐と夫人を見守っていたとき、日本人とアメリカ人の心はひとつだったと言っても過言ではありません。お二人が千島列島で視界を遮る霧に打ち負かされまいと懸命になっている時、日本人もアメリカ人も希望と不安をともにして胸の鼓動を高めていたのです。そして今、日本とアメリカと全世界は一体となり、このたびの新たな空の征服を祝しております。」

「では、リンドバーグ大佐と夫人の健康と幸運を祝して、光栄にも乾杯の音頭をとらせていただきます。お二人がこれからも友好と親善の大使として末永く活躍を続けられることを願って!」

アメリカ大使のスピーチ

アメリカ大使は以下のように語った。

「僭越ながらアメリカ合衆国を代表して、リンドバーグ大佐および夫人を暖かく迎えてくださった日本の皆さんに感謝を述べさせていただきます。この歓迎は大きな意味では、すべての国の人々にたいする真の人間性が持つ訴えの表れです。リンドバーグ大佐は国際的な人物となっており、国際的に知られております。また、大佐の傍らに魅力的で美しい奥様の姿があるのを拝見して嬉しく思います。」

「慎み深く礼儀正しい振る舞いと相まった勇敢さ、機転、進取の才と不屈の精神という素晴らしい美德に、世界中の人々が感嘆しています。」

空冷式がお気に入り

リンドバーグ大佐の新時代を開く大西洋横断飛行以来、空陸両用の米国製空冷式のエンジンに対する大佐の大きな信頼が、その改良、進歩に拍車をかけることに大きな影響を与えた。

日本訪問の際に大佐がさまざまな型式のエンジンについて語り、「アメリカは空冷式エンジンの設計の優秀さにおいては断然世界で勝っている。一方、イギリスは水冷式エンジン製造におけるリーダーであることを示してきた」と述べた。どちらの型式も様々な有利性をもっているが、一般的に言うと、空冷式星型エンジンが事業用飛行機には最も実用的であることを証明すると思うと、大佐は述べた。

彼は、非常に高度に開発されていたロールスロイス水冷式エンジンを実に高く賞賛したが、その例として、ロールスロイスのエンジンが搭載されたシュナイダートロフィー〔水上機の国際レースの優勝トロフィー〕のレーサーによって最近達成された時速 400 マイルを超えたスピードをあげた。アメリカで非常に多く使われている最もポピュラーな飛行機であるシコルスキー&フォードには、プラット&ホイットニー社やカーチス・ライト社によって製造された空冷式エンジンが装備されている。リンドバーグ大佐自身の飛行機にはライト・ワールウィンドを装備している。

出席者一覧

以下に来賓の一覧を記す。

チャールス・A・リンドバーグ大佐およびアン・M・リンドバーグ夫人、ウィリアム・キャメロン・フォーブス米国大使、大使の姪にあたるジェイムズ・S・ラッセル夫人、米国大使館参事官エドウィン・L・ネビル氏および夫人、米国大使館海軍武官イサク・C・ジョンソン大佐、米国大使館陸軍武官ジェイムズ・G・マッキロイ中佐、米国大使館商務官ハレック・A・バッツ氏および夫人、米国大使館三等書記官ウィリアム・ターナー氏、米国大使館三等書記官ケネス・ファーラー・ポッター氏、米国大使館陸軍武官補佐トーマス・G・克蘭フォード中尉および克蘭フォード夫人、陸軍政務次官・伊東次郎丸氏、海防議会理事長・伊藤乙次郎氏。

陸軍大臣秘書官・櫛淵センイチ氏、文部省顧問・工藤鉄男氏、外務政務次官・矢吹省三男爵、陸軍省軍務局徴募課長代理・山田長三郎氏、逓信大臣秘書官・ヤスダマサオ氏、逓信省電務局長・山本直太郎氏、逓信省航空局・山田道行氏、海軍政務次官・牧山耕蔵氏、海軍航空本部総務部長・前原謙治大佐、海軍次官・小林躋造中将。

逓信省航空局技術課長・児玉常雄中佐、逓信大臣の通訳を務めた浅野造船社長・小松隆氏、海軍省航空本部長・安東昌喬中将、海軍大臣男爵・安保清種大将、海軍航空本部・サトウゲンゾウ中佐、外務大臣秘書官・岸倉松氏および岸夫人、陸軍大臣南次郎大将、外務大臣・幣原喜重郎男爵、外務省情報部長・白鳥敏夫氏および白鳥夫人、陸軍省顧問・ヒサシヨウヘイ氏、逓信省顧問・平川松太郎氏、陸軍航空本部総務部長・キウチヤスタネ大佐、逓信省航空局監理課長・伊勢谷次郎氏、帝国飛行協会本部代表・橋本圭三郎氏。

逓信省電務局長・畠山敏行氏、参謀次長・二宮治重中将、日本空輸会社社長・西野恵之助氏、陸軍省軍務局防備課・島田隆一大佐、逓信省航空局長・戸川政治氏、逓信省経理局長・富安謙次氏、外務省欧米局第二課長・岡本 M 氏および岡本夫人、陸軍大臣秘書官・岡新氏、逓信次官・大橋八郎氏、中央气象台長・岡田武松氏、陸軍省高級副官・河村薫大佐、海

軍軍令部・長谷口尚真氏、文部大臣・田中隆三氏、外務省調査局第二課長・筒井潔氏および筒井夫人、外務次官・永井松三氏および永井夫人、陸軍省軍務局軍事課長・永田鉄山大佐、海軍省顧問・鍋島直縄子爵、海軍軍令部次長・永野修身中将、東京市長・永田秀次郎氏、陸軍省軍務局防備課長・桑原四郎大佐。

要塞地帯

リンドバーグ大佐は政治的な要素のある微妙な事柄については、決まってコメントを避けてきたが、先般、不運にも2名のアメリカ人飛行士が要塞地帯上を飛行したかどで罰金刑に処せられた事件に対する大佐の考えは、様々な国の要塞地帯での規則について述べた際に明らかになった。アメリカでは運河とその他の要塞地帯上空の飛行が禁じられており、英国では海軍基地上空の飛行が禁じられている。また、イタリア、フランス、日本にも同様の旧式の規則がある。「このような規則は将来の商業飛行にとって明白な障害である」と大佐は断言した。

大佐は次のように語った。「私の計算では、自身のこれまでの飛行距離は約 569,600km になります。私の知識不足かもしれませんが、要塞地帯を飛行中に、要塞の存在を知る手立てを得る方法がまったく思いつきません。」大佐の意見によると、関連する写真や見取り図は様々な国の規制によって役に立たないことは、周知の事実とのことである。

ロシア上空を飛行したことのある者は、ソビエト政府の役人を最も賞賛する。外国人飛行家には要塞地帯の表記がないロシア地図が渡され、望みの飛行地点を選ぶように言われる。したがって、飛行士は自分が要塞地帯上空を飛行しているかどうか分からない。「世界の国々は近い将来、自国の要塞地帯に関する規制を全面的に改正せざるを得ないであろう」とリンドバーグ大佐は考えている。

【写真説明】

8月28日の晩、リンドバーグ大佐と夫人は帝国ホテルの宴会場で行われた小泉又次郎逋信大臣、南次郎陸軍大臣、安保清種海軍大臣主催による公式晩餐会に招待される。小泉氏はスピーチをしているリンドバーグ大佐の右隣、リンドバーグ大佐の左にはアメリカ大使館の女主人ジェイムズ・ラッセル夫人、小泉氏の右側にリンドバーグ夫人。夫人の隣は外務大臣・幣原喜重郎男爵。テーブルの反対側、左から5人目が安保大将。その右には米国大使館参事官エドウィン・ネビル夫人。夫人の右側にアメリカ大使、そのさらに右から二人目が南大将。ネビル氏は写真の右端。小泉氏の後方に座っているのは小松隆氏。英語のスピーチを日

本語に通訳し、アメリカに放送された時には日本語から英語に通訳した。JOAK 局の白いマイクロフォンがリンドバーク大佐のすぐ前に置かれているの見える。



On the night of August 28 Colonel and Mrs. Lindbergh were the guests of Communications Minister Matajiro Koizumi, War Minister General Jiro Minami and Navy Minister Admiral Kiyokazu Abo at an official dinner held in the banquet hall of the Imperial Hotel. Mr. Koizumi is seated on the speaker's right. On the Colonel's left is Mrs. James Russell, hostess of the American Embassy. On Mr. Koizumi's right is Mrs. Lindbergh. Next to her is Baron Kijuro Shidehara, Minister of Foreign Affairs. On the opposite side of the table, fifth from the left, is Admiral Abo. On his right is Mrs. Edwin C. Neville, wife of the Counsellor of the American Embassy. To her right is the American Ambassador. Two places more to the right is General Minami. Mr. Neville is at the extreme right of the picture. Seated behind Mr. Koizumi is Mr. Takashi Komatsu, who interpreted the speeches from English into Japanese and vice versa as they were broadcast to the United States. The white microphone of station JOAK can be seen directly in front of Colonel Lindbergh.

【囲み広告】

台湾精糖株式会社

HISTORY in all ages has been made by the pioneer, the adventurer, by the man who speeds ahead of his fellows, borne onward by the swift wings of his ambition and his imagination.

JAPAN traces her beginnings to just such men, to the hardy adventurers who drove their tiny craft to the East from the southern archipelagoes, to the sturdy warriors who pushed across the straits from the Mainland of Asia. These races, so different in their origins, fused and blended to form a homogeneous people, but a people in whom the Spirit of Adventure still pulses.

OUR nation therefore feels a bond of the spirit with Colonel and Mrs. Charles Augustus Lindbergh, pioneers in the still young field of Aviation. To them and to the American People whose Ambassadors of Goodwill they are we extend our warmest greetings. May their landings always be as happy and as joyfully acclaimed as those which brought them to the welcoming soil of Japan.

TAIWAN SEITO KABUSHIKI KAISHA
(Formosa Sugar Manufacturing Co., Ltd.)
FORMOSA
and
TOKYO